第５章

建築デザインの評価基準の特徴と課題

第5章　建築デザインの評価基準の特徴と課題

5.1 調査の概要

5.1.1 調査の目的

第5章の目的は、1.7(4) の前半「優れた建築とは何か、その評価基準はどのようなものか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

建築デザインの評価基準を後進に伝え、あるいは新しい評価基準を創造することは、建築デザイン教育の極めて重要な目標であろう。現実の建築デザインの評価基準と、大学の設計演習での講評における評価基準は、同一ではないとしても、強く関連しているはずである。また、職場での実務教育は、現実の建築デザインの評価基準を伝承・創造する最前線である。

一方、建築デザイン教育の成果としての人材（建築家）や空間（建築や景観）には、景観的に見て、長所、短所があることが経験的に分かっている。つまり、建築デザインは景観的に見て歪んでおり、建築デザイン教育は歪みを拡大再生産しているのである。

したがって、優れた建築の評価基準を明らかにしなければ、建築デザイン教育から何を学び、何を改良するべきか分からない。

5.1.2 調査の内容と方法

調査の内容と方法を以下に示す。

・建築デザインの評価基準を把握するために、日本建築学会賞（作品）の受賞理由を調査し、何が評価されているのか分析する。学会賞は建築賞の中でも最も権威があり、全ての建築家がこの賞を欲していると言っても過言ではないほどの賞である。したがって、この賞の評価基準は建築デザインの評価基準の代表としてふさわしいと考えられる。

・建築の利用者側からの評価や第三者的な評価についても、参考文献（建築評論や社会学分野での建築に関する記述）から調査し、設計者側の考えとの相違を明らかにする。

・これらの調査、分析をふまえて、建築デザインの評価基準の特徴と課題を把握する。

5.2 日本建築学会賞（作品）の評価基準

建築デザインの評価基準を把握する調査するために、ここでは日本建築学会による「日本建築学会賞（作品）」の評価基準を調査する（以後、第5章では特記しないかがり、学会賞とは日本建築学会賞（作品）を指すものとする）。

建築デザインの評価基準は多様であり、学会賞の評価基準をその代表とすることには異論もあると思われる。しかし数多くの建築賞の中で、学会賞は最も権威のあるものとされており、審査員も建築に関わる各分野から構成されている。そのため、ここでは学会賞についての調査を行う。

5.2.1 既往研究・参考文献

学会賞に関する参考文献としては、次のものがある。

■「特集　日本建築学会賞受賞作品を解析する」　建築雑誌 1993 年 1 月号

この特集では、建築学会賞に関する様々な問題が論じられている。この中で大野は「学会賞と都市空間」において次のような記述を行っている [1]。

[1] 大野秀敏「学会賞と都市空間」建築雑誌 1993 年 1 月号 , pp24-25

- 学会賞はモニュメント的な建築が好み
- 学会賞建築の約６割は、建物の周囲に広い空地・公園緑地が控えている。
- 街並みの「地」の部分は、学会賞を取りにくい。
- 集合住宅は、建設量の割には受賞が少ない。
- 商業ビルも建設量の割には、ほとんど受賞していない。
- 学会賞建築のデザイン手法は、街並みの一部となる「地」の建物には適用できないはずだが、実際には市井の建築家に影響を与え、街並みを乱す結果となっている。

5.2.2 学会賞の歴史

第１回は、昭和 24 年度である。2002 年までに 139 件が選出されている。毎年３作程度が選出されているが、昭和 47 年度、昭和 53 年度、昭和 58 年度は該当作品がなかった。

初期には、巨匠と呼ばれる建築家が受賞を重ねたため、ある時期から原則として過去に学会賞を受賞した建築家の作品は選出しないという内規ができた。それ以来、学会賞は新人賞的な性格を帯びてきたと言われている。一方、きわめて優れた作品は、原則にかかわらず学会賞を重ねて受賞している [2]。

[2] 最近では、「東京国立博物館法隆寺宝物館」で谷口吉生が2度目の受賞を果たしている。

審査員は 10 名で、研究者、建築家、構造、設備、歴史などの専門家などで構成されている。審査員の任期は２年で、１年ごとに半分ずつ交替している。1987 年度から、審査員の氏名と各審査員の寸評が公表されるようになった。

その他、詳細は、上記の「特集　日本建築学会賞受賞作品を解析する」に詳しい。

5.2.3 学会賞の選定理由の分析

ここでは学会賞の受賞作品発表時に公表される、「選定理由」を分析した。分析方法は、あらかじめ評価項目を拾い出しておき、選定理由のなかで、その項目が評価されているかどうかを、作品ごとに確認した。そのうえで、年代別に、評価項目が表れる頻度を集計した。結果をまとめたものが図 5-1 である。

この集計では、選定理由における評価項目の重要度（作品を評価する上でその項目が重視されていたかどうか）は反映されていない。これについては、筆者が選定理由を読んで定性的に把握を行った。

5.2.4 学会賞の評価基準に対する考察

図 5-1 に示す調査結果や、受賞作品とその選定理由に基づいて、学会賞の評価基準について考察する。

(1) 意匠や計画に関する評価は常に多い

当然だが、建築の意匠や建築計画に関する評価は、いつの時代も非常に多い。これらは建築を評価する上で非常に重視されている。

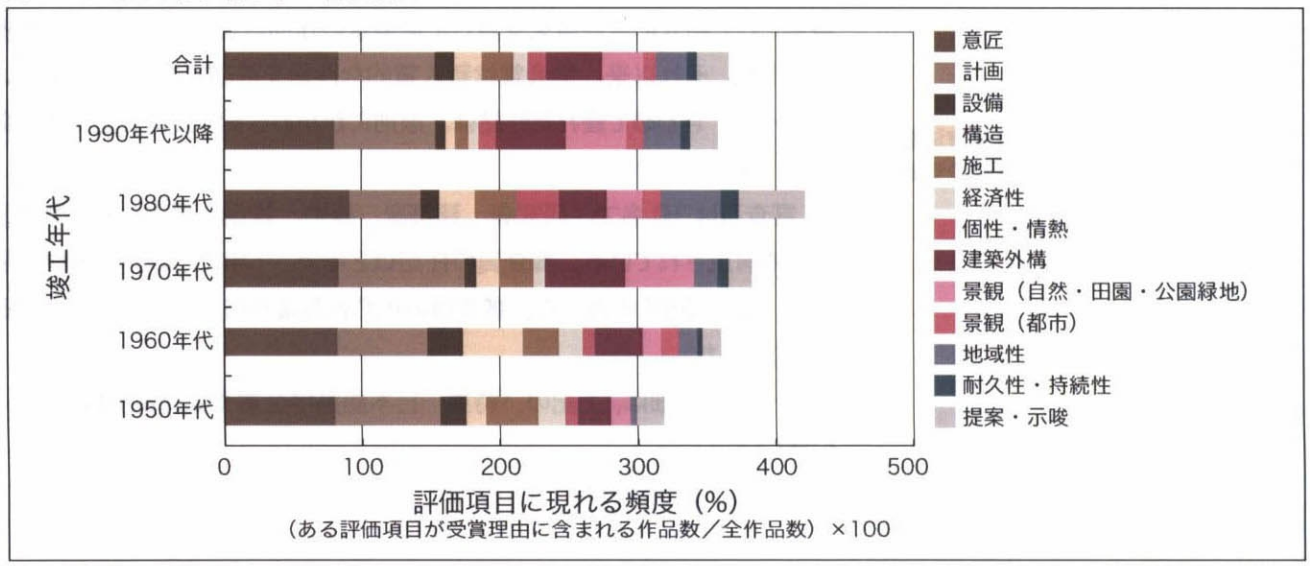
(2) 初期の学会賞作品は、モニュメント的なものが多い

大野も指摘（前出）しているように、初期の学会賞作品には、モニュメント的なものが多い。この理由の一つは、学会賞がスタートした当時は終戦直後であり、受賞作品の周りに建築が少ない時期なので、大規模建築は否応なしにモニュメントになるということもある。しかし、公園のなかに街並みから独立して建設された近代建築の類が、建築界の主要なテーマの一つであるという状況は、現在まで続いている。

(3) 公園の中の建築は評価され、街なかの建築は評価されにくい

大野の指摘のように、公園や田園の中に建設された作品は多く、その場合、周囲の景観と建築の関連が評価されていることが多い。一方、都市内の建築で街並みとの関連を評価されているものは、比較的少ない。

図 5-1 *建築学会賞（作品）の評価項目*



(4) 街並みという範囲を表彰したものは少ない

一人の作家が複数の作品によって街並みを形成したものとしては、吉田桂二の「古河歴史博物館と周辺の修景」と石井修の「目神山の一連の住宅」のみが学会賞に選出されている。また、一つの作品が、街並みに影響を与えたとして評価されているものもいくつか見受けられる[3]。

学会賞の業績部門では大規模なプロジェクトなどにおいて地区全体の景観を含めてデザインした例などが表彰されている[4]。また、文化賞として小布施の街並みが表彰されている。

しかし、このような受賞作品は例外に属する。街並みという範囲を複数の建築家のコラボレーションの成果として表彰したものは学会賞の作品部門、業績部門には非常に少ないのである。小規模なプロジェクトの積み重ねが、街の景観を向上させたというような例が、建築家の作品としてもっと評価されるべきではないかという印象を受けた。そのような例がないから表彰できないのかもしれないが、これは、鶏と卵の関係だと言うこともできよう。

また、このような状況の背景には、建築関係者の建築物の認識が自己完結的であるということがある。建築について批評を行う際は、作品とその周辺との境界が常に強く意識されている。作品とその周囲との関係について議論はするが、それは重要な評価項目ではない。

[3] 最近では、元倉眞琴の「県営竜蛇平団地」、香山壽夫の「彩の国さいたま芸術劇場など

[4] 業績賞のリストを資料編に掲載した。景観に強く関わる業績として、最近のものとしては、
「山形県金山町『街並みづくり100年運動』の推進に関わる一連の業績」林寛治・片山和俊・住吉洋二・山形県金山町, 2002、
「日吉ダム景観整備計画の策定及び実施に関する一連の業績」樋口忠彦・團紀彦・日吉町・水資源開発公団日吉ダム建設所・財団法人ダム水源地環境整備センター・株式会社空間創研, 1999
がある。

(5) 外構部分が評価されたものは、かなり多い

西新宿の三井ビルの５５広場は、建築外構が高く評価されている代表的な例である。このほかにも多くの作品の外構が評価されており、建築外構が建築物の価値を決める重要な要素として認識されていることが分かる。

(6) 古い建築のリニューアルの受賞は１つ

古い建物のリニューアルでは、浦辺鎮太郎の「倉敷アイビースクエア」のみが受賞している。これは学会の歴史の部門からの推薦があったということである。

学会賞の業績部門には、古い建物の保存が表彰された例があるが、こちらは文化財的な価値の高いものを表彰しており、大胆にリニューアルしたものは表彰されていない。

図 5-1 を見ても、地域の歴史や風土などのコンテキストの表現は、評価項目としては比較的重視されていないが、80 年代以降はそれらの要素がやや増えてくる。

(7) 社会的なストックとしての評価は軽視されている

学会賞では斬新なものが評価されることが多く、無難はほとんど評価されない。一方、耐久性や持続性、機能変化への対応などは、あまり評価されていない。

学会賞を受賞した建築で、竣工後３０年以上を経ても価値を失わない建築は少ないかもしれない。実際に、学会賞作品でも現存しない建物や、大規模な改変が行われたものは多い[5]。

建築界では、社会的なストックをつくろうという思想は、あまり重視さ

[5] 建築学会賞作品の、竣工後の状態については、やや古い資料であるが、日経アーキテクチュアの 1991 年 4 月 15 日号に「徹底調査／日本建築学会作品賞の受賞作は今」がある。

れていないようである。これは、木と紙の建築をルーツとする日本の伝統かもしれない。よく言われるように、兼好法師の徒然草の時代から、現世の建物は仮の住まいであるという思想があったし、社会のシステムとしても、古くなった建物を立て替えるサイクルがあらかじめ考慮されていた。そのような歴史的背景を持つ日本では、建物をストックと認識するのは困難なのかもしれない。

(8) 審査員は建築関係者のみで構成されている

学会賞の審査員は、建築家の他に、建築関係者や構造、設備の専門家も含まれているが、建築界以外の有識者は含まれていない。そのため建築の評価が社会的な評価から乖離する危険をはらんでいる。

5.3 建築の社会的・第三者的な評価基準

建築の評価は、建築家による評価以外に、社会的・第三者的評価もある。ここでは次の項目を調査する。

・文化勲章・文化功労者に選ばれた建築家の選定理由
・建築評論家による建築の評価
・社会学者による建築の評価
・文化人による建築の評価

5.3.1 文化勲章・文化功労者に選ばれた建築家の選定理由

(1) 文化勲章

文化勲章は、昭和 12 年に制定されたもので、2002 年までに 313 人が受章している。このうち建築、土木に関する受章者は、表 5-1 に示す 11 人である。内閣府のホームページ[6]から文化勲章の説明を引用する。

[6] 内閣府のホームページ「日本の勲章・褒章」 http://www8.cao.go.jp/intro/kunsho/index.html

文化勲章

我が国の文化の発達に関して顕著な功績のあった方に対し授与される単一級の勲章です。

受章者は、文化功労者選考分科会に属する委員全員の意見を聴いて文部科学大臣から推薦された方について賞勲局で審査を行い、閣議により決定されます。

毎年1回 11 月3日の文化の日に発令され、おおむね5名の方が受章されています。勲章は宮中において天皇陛下から親授されます。受賞者は、いずれも大家である。受賞理由は、特定の作品ではなく、業績の積み重ねであり、選定理由は、社会に対する多大な貢献である。(内閣府のホームページより引用)

[7] 文化勲章受章者の業績に関しては、溝川徳二「文化勲章名鑑」名鑑社、1999 などの文献に詳しい。

表 5-1 を見て明らかなように、受章者はその道の大家である。また、受賞理由は業績[7]による社会への多大な貢献である。すでに評価の定まっ

表 5-1 文化勲章受章者リスト 1937-2002 全 313 人から建築・土木関連の受賞者を抜き出したもの

氏名（芸名）	所属	分野	日付	業績
伊東忠太	東京帝国大学名誉教授	建築学	昭和 18 年 4 月 29 日	法隆寺の建築学的研究
吉田五十八	東京芸術大学名誉教授	建築	昭和 39 年 11 月 3 日	現代数寄屋を創案
村野藤吉（村野藤吾）	日本芸術院会員	建築	昭和 42 年 11 月 3 日	「広島世界平和記念聖堂」などの建築設計
鈴木雅次	内務技監	土木工学	昭和 43 年 11 月 3 日	港湾工学の権威
赤木正雄	貴族院議員	砂防計画学	昭和 46 年 11 月 3 日	全国治水砂防協会を設立
内田祥三	東京大学総長	建築学・防災工学	昭和 47 年 11 月 3 日	鉄骨構造学の開拓者で東大安田講堂を設計
谷口吉郎	東京大学名誉教授	建築	昭和 48 年 11 月 3 日	建築計画、建築史、記念会堂などの設計に業績
丹下健三	東京大学名誉教授	建築	昭和 55 年 11 月 3 日	世界的な建築家として都庁舎など数々の設計
武藤清	東京大学名誉教授	建築構造学	昭和 58 年 11 月 3 日	柔構造理論により「霞ヶ関ビル」を設計
島秀雄	日本国有鉄道理事技師長	鉄道工学	平成 6 年 11 月 3 日	新幹線成功の技術上の立役者
芦原義信	東京大学名誉教授	建築	平成 10 年 11 月 3 日	空間構成を生かし堅実さの中に明快な作風を確立

表 5-2 文化功労者リスト

氏名	分野	年
内藤多仲	建築学	1962
富樫凱一	橋梁工学	1988
岡本舜三	土木工学	1990
沢田敏男	農業土木学	1994
吉村順三	建築	1994
山本三郎	河川工学	1996

文化功労者の中から、建築・土木関連の受章者を抜き出したもの
文化勲章は、文化功労者の中から選んで授与される。表 3-3 には、文化勲章受章者は含まれない。

た大家が受章しており、文化勲章としての建築に関する独自の評価基準は見られない。

(2) 文化功労者

文化功労者は昭和 26 年に制定された制度で、文化の向上発展に関し、特に功績顕著な者に年金を支給し、検証するために設けられた者である。文化勲章は原則として文化功労者の中から選ばれる。

土木・建築関連の文化功労者を表 5-2 に示す(文化勲章受章者を除く)。文化功労者の受賞理由は明らかにされていないが、大家であることは文化勲章と同様であり、既に評価の定まった人が選定されており、文化功労者の評価基準に独自性は見られない。

5.3.2 マスメディアや評論家による建築の評価

雑誌や新聞、テレビ、ラジオなどマスメディアによる建築の評価には、建築学会賞とは異なる評価基準を期待すべきである。建築界の外からの第三者的な評価が、社会的存在としての建築の価値を高めることにつながる。しかし、現状では残念ながらそのような建築批評は、ほぼ皆無であるということが建築界での定説となっている。

建築批評の不在については、建築学会でも問題視されており、多くの参考文献が見受けられる [8]。これらをまとめると、次のようなことが分かる。

- 建築評論家の多くは、建築関係者であって第三者ではない。彼らの評論は専門用語が多く、建築関係者（の一部）にしか理解できない。
- 「新建築」などの建築雑誌は、建築を紹介するものであり、評価するものではない。
- 素人にも分かりやすい言葉で、建築について批評する第三者はいない。
- 素人向けの建築関連の雑誌として、住宅に関するものがいくつかあるが、そこでは建築は商品の一つであり、評論ではなく宣伝としての意味合いの強い媒体である。

このように、建築界の外からの第三者的な評価は非常に少なく、大きな問題である。

[8] 建築評論に関する参考文献のいくつかを以下に示す。
「特集　建築をめぐるジャーナリズム」建築雑誌 Vol. 114, No. 1443, 1999 年 9 月号, pp9-49
「特集　現代建築批評の方法」10+1 No14, INAX 出版, 1998
平井俊晴「資料・建築評論のあり方をめぐって」および「『建築評論』論関係の参考文献リスト」建築思潮 05, 学芸出版社, 1997
藤森照信, 三宅理一, 八束はじめ「日本の建築批評 100 年の系譜」INAX BOOKLET 建築への思索, INAX 出版, 1992
「特集　建築ジャーナリズムの地平　建築メディア考現学」ガラス 95 SPRING, 旭硝子, 1995
宮内嘉久「建築ジャーナリズム無頼」晶文社, 1994

5.3.3 社会学者による建築の評価

建築は社会学者の研究対象の一つである。社会学者の上野千鶴子は、その著書 [9] の中で家族の生活と住宅建築を関連づけて論じている。

そこでは家族構成や家族としての規範の変化、少子高齢化や高度情報化などの社会の変化、介護保険などの制度の変化などに対応して、建築やコミュニティーのあり方も変わるべきではないかという問題が提起されている。住宅における個人のスペース、コモンスペース、パブリックスペースのあり方や配置を考える上で、それらを用いる人々の活動や心理（および現代におけるそれらの変化）に基づいた議論が行われ、刺激的である。

また、コミュニティーについて考えるとき、建築家にとっては、一つの空間に集まっている人々の間でのコミュニケーションが全てであるが、社会学

[9] 上野千鶴子「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」平凡社、2002

者にとっての空間は、電話やE-mailと同等のコミュニケーションの媒体にすぎない。

このように、建築界の外側から建築についての評論が行われることは、建築物の新しい評価基準を与え、非常に価値の高いことだと思われる。景観デザインでは、土木構造物をデザインの対象とすることが多いが、それが建築物と同じく社会基盤である以上、社会学の立場から景観デザインについての評価があっても良い。それは景観デザインの質を高める上で重要な役割を果たすであろう。

5.3.4 文化人による建築の評価

建築は文化であるから、文化人の興味の対象でもある。茶道における、茶室のしつらえについてのこだわりは、非常に強いものがあるし、有名建築家のクライアントには、名だたる芸術家も多い。しかし文化一般に対して目利きであるはずの文化人は、建築の批評は全く行っていない。これは、日本人が他人の批評に積極的でないことも理由の一つであろう。

海外の例では、イギリスのチャールズ皇太子がイギリスの建築に関する厳しい批評を行っている[10]。彼は現代建築に対して概ね批判的であり、その根拠は基本的に彼の評価基準に基づいている。チャールズ皇太子が示す、建築の基本原則「われわれが守るべき10の原則」は、次のものである。

[10] チャールズ皇太子著、出口保夫訳「英国の未来像—建築に関する考察」東京書籍, 1991
原 書：The Prince of Wales Prince Charles "A VISION OF BRITAIN : A Personal View of Architecture" Doubleday, 1989

- 場所
- 尺度（スケール）
- 囲い地（エンクロージャー）
- 装飾
- 看板と照明
- 建築の格付け（ヒエラルキー）
- 調和
- 材料
- 芸術
- コミュニティー（地域共同体）

概して、目新しいものはない。チャールズ皇太子は、歴史と伝統を重視し、風土に根ざした建築を高く評価する傾向にあり、懐古主義だという批判もあるようだ。

ここで注目すべきことは2つある。一つは、彼が自分の評価基準を明示し、それに基づいて真正面から建築の批判を行い、それに対する彼自身への批判をきちんと受け止めていることだろう。

もうひとつは、彼の用いる言葉の平易さである。素人にも分かりやすい言葉で建築批評が行われている。曰く、「... 墓石のようなタワー群 ...」、「...（この建物は）ワードプロセッサーのようにみえる ...」。

チャールズ皇太子の批評には、特に目新しい評価基準は見られないが、現代においては、それらが軽視されがちであることも確かである。日本建築学会賞が斬新なものを高く評価する傾向にあり、歴史や伝統、風土を重視しているだけでは、ほとんど受賞の見込みがないことを考えれば、日本でもチャールズ皇太子のような評価基準を力説する文化人がいることが望ましく思われる。

5.4 結論：建築デザインの評価基準の特徴と課題

5.4.1 調査結果

(1) 芸術・文化・思想としての建築を重視

建築デザインでは、建築の芸術・文化・思想としての側面を重視する。そのため、技術的な点よりも文化的な点を重視する傾向にある。

例えば、建物の規模が大きいからといって単純に評価はしない。また、施工費用を軽視はしていないが、安いだけでは評価されず、建築の質の高さと両立していなければならない。また、施工精度や施工時の安全性については、ほとんど話題にはのぼらない。構造的な点についても評価はするが、構造そのものの評価というよりは、その構造によってもたらされた空間の質や構成といったものを評価している。

この理由の一つとしては、建築には様々な賞があり、構造設計や設備設計などの技術的な点や、施工の優秀さなどは、意匠関連の賞とは別の賞[11]で評価されるということがある。しかし、建築家の役割は、全てを統合して空間を構築することであるから、建築のある側面を軽視するというのは問題であろう。

[11] 例えば、優れた建築構造に関する業績は松井源吾賞で表彰される

(2) 新奇性やオリジナリティーをトータリティーよりも重視

建築デザインでは、斬新なことやオリジナリティーが非常に重視されている。部分的に極めて秀でている面があれば、それ以外にかなりの欠点があっても目をつぶる傾向にある。普通の人には住みにくい住宅[12]、果ては違法建築[13]さえ、学会賞を受賞している。逆に無難にまとめることはほとんど評価されない[14]。

この理由の一つには、経験を積めば無難なものは誰でも作れるようになるという考えがある。斬新なものを生み出すのは限られた才能であり、それを評価することが建築の進歩につながると考えているのである。また、もうひとつの理由は、次に述べるように建築デザインの評価の閉鎖性もあると考えられる。

[12] 例えば「塔の家」や「住吉の長屋」など

[13] 昭和55年度の学会賞作品「生闘学舎」は違法建築である

[14]「古河歴史博物館と周辺の修景」の学会賞の選定理由では、「無難が評価された」ことに対する反対意見がいくつか述べられている。また、無難が評価された例はほとんどない。

(3) 閉鎖的、主観的な建築デザインの評価

学会賞の選考委員は建築家と建築研究者であり、建築界以外の人は含まれていない。また、先に述べたように日本では、メディアによる第三者的評価がなく、社会学者による評価も少なく、文化人による批評もない。さらに、一般市民にとっては、新奇性やオリジナリティーはさしたる問題ではなく、誰が設計したのかということさえ興味の薄いことである。

このように、建築デザインの評価は、建築界という極めて限られたムラ社会の中で建築の評価が行われているため、建築デザインの評価は世間からかけ離れる恐れがある。

また、建築賞の評価はかなり主観的であり、客観性があまり重視されない。これは芸術・文化・思想としての建築を評価する上で避けられないことであろう。建築における評価基準は建築家それぞれのものであり、客観的・絶対的な評価基準や基準による設計ではなく、独自のコンセプトの設定とその具現化が重視されている。そのため建築デザインの評価は、設

計者の評価基準と評者の評価基準の衝突であり、結果はかなり主観的である。

(4) 自己完結的な建築の認識

建築関係者が建築を評価する際、建築を自己完結的に認識している。作品とその周囲との関係について議論はするが、作品と周辺との境界が強く意識されている。どこに境界があるのか分からないようなデザインはしないし、評価もされにくい。自己主張が重視され、他力本願的なところがないのである。

(5) 維持管理や耐久性、用途変更への対応の軽視

建築デザインでは、維持管理や耐久性、用途変更への対応に関する評価が比較的軽視されている。学会賞建築にも耐久性に欠ける作品がある。優れた建築でも30年程度で取り壊されることが多く[15]、建築が社会基盤のストックとなっていないことは、建築界でも問題視されている[16]。

優れた建築が撤去される際、抗議や保存運動が行われ、社会的な問題となる場合もある。優れた建築の価値を軽視する施主の問題もあるが、耐久性や用途変更への対応を軽視する建築界にも問題があるだろう。

一方、古い建物のリニューアルが受賞したものは「倉敷アイビースクエア」の1件のみである。

[15] 既に取り壊された学会賞建築は、筆者が確認しているだけでも、10件ある。

[16]「対談／松村貞次郎氏×近江栄氏：”保存のキーワード”が見つからない」日経アーキテクチュア 1991年4月15日号, pp92-99

[17]「浪合学校」では、計画や設計に関して住民参加が積極的に行われ、そのことが高く評価されている。

(6) ソフトウエアを評価

建築は人の活動の場であるから、使いやすさは重要である。建築の使い方は多様であり、時間の経過によって変化することもある。建築デザインではハードウエアの評価が中心的であるが、近年は建築の使い方や運営方法などのソフトウエアも重要な評価の対象となりつつあり[17]、今後その傾向は強まると予想される。

5.4.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案の教育目標について、いくつかの示唆を得ることができた。また、以下の内容は、第7章で建築デザインと従来の土木デザイン、景観デザインを比較した上で、再度考察を行う。

(1) 教育目標：どのような人材が必要なのか

(a) トータリティーを重視したデザイン能力

初期案では、「分析ではなく、統合する能力」「用・強・美に関する全ての条件を考慮し、一つの答えを出す能力」と記述していたが、「用・強・美に関する全ての条件」は、より詳しく記述する必要がある。

建築デザインから学ぶ点としては、芸術・文化・思想としての建築を重視している点である。また、改良が望ましい点としては、新奇性やオリジナリティーをトータリティーよりも重視している点や、自己完結的な建築の認識であろう。このような評価基準でデザインされた建築は、単体として良いとしても、それらが集まった町並みとしては調和のとれないものとなるであ

ろう。

(b) 維持管理や耐久性、用途変更への対応を重視したデザイン能力

初期案の「用・強・美に関する全ての条件」には、耐久性に関する条件も含めなければならない。建築デザインの、維持管理や耐久性、用途変更への対応を軽視する評価基準では、社会的なストックとしての社会基盤を構築できない。

(c) 使いやすさを重視したデザイン能力

初期案の「用・強・美」の用は、言うまでもなく重要であるが、建築デザインから学ぶ点としては、施設の運営や企画などのソフトウエアの提案も重視されていることであろう。

(d) 主観的な主張能力

初期案では「コミュニケーションの力」と記述している。芸術・文化・思想としての建築を評価する上で、主観的な評価は避けられないものであり、主観的な主張能力を必要なものとして重視する建築デザインの姿勢には、学ぶべきものがある。一方、建築デザインの評価が閉鎖的であり社会一般の評価からかけ離れる恐れがあることは、改良すべき点である。

(e) 広い視野を持つ能力

初期案では「図だけでなく地をデザインする能力」と記述している。建築デザインの、自己完結的な建築の認識では、建築の周辺も含めた風景の美しさを想像できない。敷地だけでなくその周囲へも視野を広げなければならない。

参考・引用文献（第5章）

「特集　日本建築学会賞受賞作品を解析する」建築雑誌 1993 年 1 月号

「徹底調査／日本建築学会作品賞の受賞作は今」日経アーキテクチュア 1991 年 4 月 15 日号

内閣府のホームページ「日本の勲章・褒章」http://www8.cao.go.jp/intro/kunsho/index.html

溝川徳二「文化勲章名鑑」名鑑社、1999

「特集　建築をめぐるジャーナリズム」建築雑誌 Vol. 114, No. 1443, 1999 年 9 月号 , pp9-49

「特集　現代建築批評の方法」10+1 No14, INAX 出版 , 1998

平井俊晴「資料・建築評論のあり方をめぐって」および「『建築評論』論関係の参考文献リスト」建築思潮 05, 学芸出版社 , 1997

藤森照信 , 三宅理一 , 八束はじめ「日本の建築批評 100 年の系譜」INAX BOOKLET 建築への思索 , INAX 出版 , 1992

「特集　建築ジャーナリズムの地平　建築メディア考現学」ガラス 95 SPRING, 旭硝子 , 1995

宮内嘉久「建築ジャーナリズム無頼」晶文社 , 1994

上野千鶴子「家族を容れるハコ　家族を超えるハコ」平凡社、2002

チャールズ皇太子著、出口保夫訳「英国の未来像—建築に関する考察」東京書籍 , 1991
原書：The Prince of Wales Prince Charles, *A VISION OF BRITAIN : A Personal View of Architecture*, Doubleday, 1989

「対談／松村貞次郎氏×近江栄氏：”保存のキーワード”が見つからない」日経アーキテクチュア 1991 年 4 月 15 日号 , pp92-99

第６章

結論１：建築デザイン教育の特徴と課題

第6章　結論１：建築デザイン教育の特徴と課題

第6章では、第2章から第5章で明らかとなった、建築デザイン教育の特徴と課題、および、そこから得られた景観デザインのあり方：初期案への検証と改良への示唆をまとめる。

6.1　第2章 優れた建築家の学歴、職歴

第2章の目的は、1.7(1) で述べた「優れた建築家を育てる建築デザイン教育は存在するか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

大学や職場での建築デザイン教育が優れた建築家の育成にどれだけ貢献しているのか、あるいは、優れた建築家は独学や偶然の産物なのか不明である。優れた建築家を多数輩出する大学や職場と、そうでない大学・職場があることはだいたい分かっているが、その差がどの程度有るのか不明である。もし有意な差があるのであれば、それは優れた教育とそうでない教育のレベル差があり、それが結果として人材輩出のレベル差に現れたと考えられる。

もし、優れた建築家を育てる建築デザイン教育が存在しないのであれば、景観デザイン教育も成立しない可能性が高い。また、建築デザイン教育から学べることは何もないかもしれない。

そこでまず、優れた建築家がどのような教育を受けてきたかを把握するため、学歴、職歴を調査した。また、収集したデータを数量化Ⅱ類により統計的に分析した。

その結果次のことが明らかとなった。

6.1.1 調査結果

(1) 優れた建築家を輩出する大学や職場と、そうでないものがある

建築賞を受賞するような優秀な建築家は、その学歴・職歴に大きな共通点や特徴、偏りといったものがあることが明らかとなった。学歴では、優秀な建築家の出身大学が極めて少数の大学に偏在しており、職歴についても、少数の実務教育パターンによって教育されている（図 6-1 ～ 6-3)。

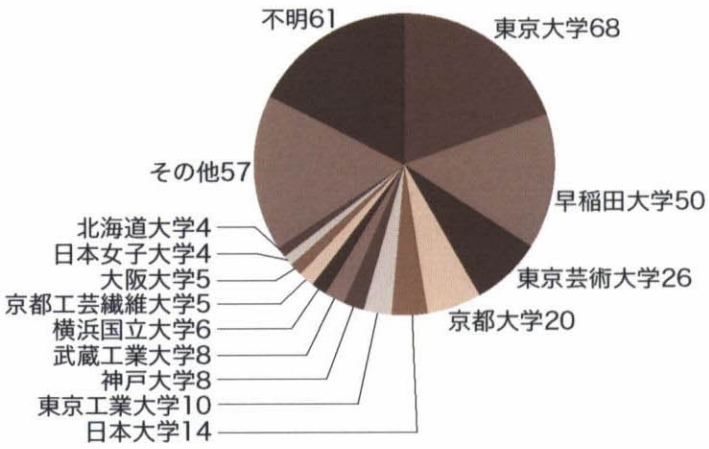


図 6-1 *（図 2-5 再掲載）調査対象建築家の出身大学（単位：人）*
調査対象は、表 2-2 に示す建築家 346 人

図 6-2（図 2-12 再掲載）調査対象建築家の職歴の分類（単位：人）

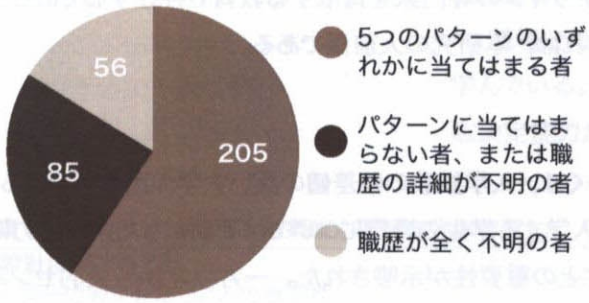
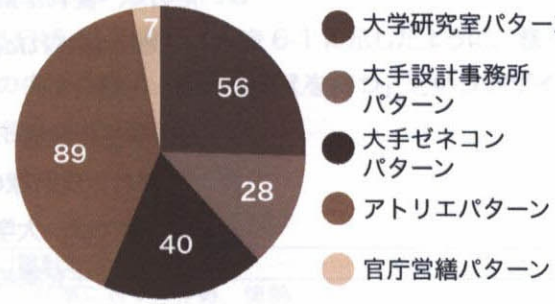


図 6-3（図 2-13 再掲載）職歴の5つのパターンのパターン別人数（単位：人）
1人が複数のパターンに当てはまる場合は、複数回カウントした



(2)「優れた建築家を育てる建築デザイン教育」が確かに存在する

数量化Ⅱ類による分析によれば、このような学歴・職歴のパターンに当てはまらない者は、建築賞を受賞する可能性が極めて乏しい。逆にパターンに当てはまるからといって受賞する確率は五分五分でしかない。今までのところ、ある学歴・職歴のパターンに沿って修行することは、優れた建築家になるための十分条件ではないが、必要条件であるといえる。

このような調査・分析結果から推論されることは、優れた建築家は建築家自身の努力や偶然だけで育成されるのではなく、「優れた建築家を育てる建築デザイン教育」というものが確かに存在し、それが彼らの学歴・職歴の特徴となって表れているということである。

(3) 職場での実務教育が大学教育よりも重要である

数量化Ⅱ類による分析では、優れた建築家の育成のためには、大学教育（あるいは大学以前の教育）よりも実務教育のほうがより重要であるという結果となった。また、大学以前の教育と大学教育の重要性の比較はできなかった。ただし、この分析の信頼性は高くないため留保が必要である。

(4) 優れた建築家は、大学以前の学力が高い

優れた建築家の多くは、入学試験の偏差値の高い大学の出身者である。

(5) 大学教育の重要性が推測される

東京大学と京都大学は偏差値は同等であり、建築学科の伝統もあるが、東京大学の方が多くの優れた建築家を輩出している。また日本大学や武蔵工業大学などは、偏差値はあまり高くないが、多くの優れた建築家を輩出している。

したがって、大学以前の教育による学力（偏差値）とは別に、大学における教育も、優れた建築家の育成に重要であることが推測される。

6.1.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案について、次のような示唆を得ることができた。

(1) 優れた景観デザイン教育が存在する

優れた建築家を育てる建築デザイン教育が確かに存在することが分かったので、優れた景観デザインの専門家を育成する教育も存在するであろうことが示唆された。これは、本研究の大前提である。

(2) 学生の資質

優れた建築家の多くは、入学試験の偏差値の高い大学の出身者である。初期案では、大学に入学する学生の資質については不明だったが、学力に優れた学生を集めることの重要性が示唆された。一方、才能や美的センスなどについては未解明である。

6.2 第3章 インタビューによる建築デザイン教育の調査

第3章の目的は、1.7(2)「大学以前、大学、職場での教育のどれが重要か?それぞれの場で何をどのように学んでいるのか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

美的な才能は幼少時の環境の影響が大きいことが分かっている。また、既往研究では、建築設計者一般にとって、大学よりも職場での教育の方が重要であることが分かっている。しかし、優れた建築家にとって、大学以前、大学、職場での教育のどれが重要なのか必ずしも明確ではない。また、それぞれの場で何を学んでいるのかも不明である。

これを明らかにすることは、景観デザイン教育において、大学で教育する内容や、職場で教育する内容を判断するために有益だと考えられる。

そこで、次の項目について建築家へのインタビューを行った。

(1) 幼少時～大学以前の環境や教育の状況と、その影響。および建築家を志した理由・きっかけ

(2) 大学・大学院教育の状況と、そこで学んだこと

(3) 職場での教育の状況と、そこで学んだこと

(4) 大学における建築教育に求めること

調査の結果、次のことが明らかとなった。

6.2.1 調査結果

(1) 職場での実務教育が最も重要であり、職場は建築スクールとなっている

優れた建築家の育成には、職場での実務教育が、大学以前の教育や、大学教育よりも圧倒的に重要である。その理由は、大学教育が紛争などの理由により未成熟だったということもあるが、職場は実践の場であり、真剣勝負の場であるという点も大きい。

優れた建築家のもとには、大学での人脈によって優れた才能が集まり、建築スクールとでもいうべきものを形成している。そこでは、建築デザインに必要なあらゆる要素が、実践という真剣勝負の場において、師匠から弟子へと伝えられている。その中には、本や雑誌、web などからは得ることができず、個人から個人へと直接伝達されるものも多く、この点が建築デ

ザイン教育において、ことさらに「師弟関係」が重視される理由である。

(2) 職場での建築デザイン教育の内容

職場での建築デザイン教育では、表 6-1 に示したように、様々なことを学んでいる。その中でも特に「自分の考えを持つ」というデザイン的な意志決定能力が重視されている。

表 6-1（表 3-4 再掲載）建築家が職場で学ぶ内容

設計に関すること	設計以外のこと
・自分の考えを持つことの重要性 ・建築史 ・建設の文化・芸術的側面 ・建築の思想、理論 ・形態の美しさ（プロポーション、構図、仕上げ、ディテール、納まりなど） ・場の読み方、コンテキスト、風土や歴史文化と意匠 ・プレゼンテーション能力 ・機能と形態、空間構成 ・都市計画、まちづくり ・構造、材料、施工 ・設備（光、音、熱など） ・積算 ・法規	・仕事に対する姿勢、情熱 ・施主との対話の姿勢、折衝の仕方、設計料の交渉方法 ・共同設計者やメーカーなどとの話し方 ・段取りの立て方 ・意志決定の方法 ・事務所の経営方法 ・建設には直接関連しない文化的・教養的な内容

(3) 優れた建築家は、大学教育によって建築の基礎や雰囲気を学ぶとともに、人脈を築いている

建築家が大学で身につけたことを大まかに分類すると、建築の基礎、建築家の雰囲気、人脈の3つである。

(a) 建築の基礎を学ぶ

優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いており、建築の基礎的な知識や技術を学んでいる。

(b) 建築家の雰囲気

「建築家の雰囲気」とは、建築教育関連の文献に頻出するキーワードであるが、その実態は、建築家の先生（プロフェッサー・アーキテクト）の服装であったり、部屋の内装、趣味、話し方、建築に対する情熱など、建築家という生き方とでもいうべきものである。これらは、学生に建築に対する夢や感動、建築家という職業への憧れ、困難に立ち向かう勇気や生きる力を与える効果がある。

(c) 出会いの場としての大学

大学の機能の一つとして、出会いの場の提供がある。建築家の雰囲気を味わったことや、建築事務所でのアルバイトの経験、大学時代の人脈は、後の建築家の活動に大きな影響を与えている。人と人の出会いが、優れた才能を見いだし、活躍の場を与えることにつながっている。

(4) 旅行をして良いものを数多く見ることが重要

建築家が大学生に求めることは建築家によって様々であるが、「旅行をして良いものを数多く見ること」は、多くの建築家が重視している。

(5) 大学以前の教育は、建築家を志すきっかけを与え、建築家に必要な才能を芽生えさせている

幼少時から高校時代の環境が建築を志すきっかけとなったり、原風景が後の創作活動に影響を与えていることが、既往研究やインタビューの結果から明らかとなった。また、建築を志す子供の資質として、絵画、彫刻などの芸術的センスと、理数系の興味や力量を併せ持っている例が多く、学校の成績も優秀であることが多い。

また、大学教育と、大学以前の教育のどちらが建築デザイン教育にとって支配的な要因であるかという点は、明らかにはならなかった。これは、どちらが重要であるかという問題ではなく、それぞれから学ぶ要素が異なっているため、比較する意味が薄いように思われた。

6.2.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案について、いくつかが検証され、また示唆を得ることができた。

(1) 教育目標：どのような人材が必要なのか

(a) デザイン的思考による意志決定能力の重要性

前述のように建築家が師匠から学んだこととして力説することは「自分の考えを持つこと」である。これは、景観デザインにおいても適用できると思われる。このようなデザイン的思考による意志決定能力の重要性は、初期案に含まれており、今回の調査によって検証された。

(b) コミュニケーションの能力

建築デザインにおける意志決定は客観的な基準に依らないため、自分の考えで他人を説得するためのプレゼンテーションやコミュニケーションの力が重要である。これは、景観デザインにおいても同様である。コミュニケーションの能力の重要性は、初期案に含まれており、今回の調査によって検証された。

(c) 基礎的概念、基礎的スキル

基礎的概念やスキルは、大学での建築デザイン教育の重点である。特に設計演習による基礎的スキルの訓練が充実している。

基礎的概念やスキルは初期案にも含まれており、今回の調査によって検証された。

(d) 感性、ものづくりへの興味と情熱

建築家の才能や感性、ものづくりへの興味と情熱は、大学以前の環境や教育の影響が大きい。これは、景観デザイン教育においても同様だと考えられる。

初期案で教育目標に含めた「才能、ものづくりに対する興味」が、大学以前の要素が大きいとすると、このような資質を持つ学生を、どのように集めるかという、大学入試の問題になる。

(e) 人脈

建築デザインでは優れた才能が優秀な建築家のもとに集まることによって、建築スクールを形成している。初期案には人脈は含まれていないが、これを追加する必要がある。

(2) 教育内容

表 6-1 に示した建築デザイン教育の内容について、従来の土木デザイン教育との比較を行い、両者に共通の項目と建築デザイン教育独自の項目に分類したのが表 6-2 である。インタビューにおいて建築家が師匠から学んだこととして力説する項目は、表の左側（建築独自の項目）のものが多い。このような建築デザイン教育では中心的な項目が、従来の土木デザイン教育では抜け落ちている。

景観デザイン教育では、表の左側の項目も重視するべきであろう。また、3.3.4 で示した、建築家が大学教育に求める内容も参考になる。これらに基づいて初期案の教育内容を改良することが望ましい。

表 6-2（表 3-5 再掲載） 建築デザイン教育と従来の土木デザイン教育の、教育内容の比較

建築デザイン教育に含まれるが従来の土木デザイン教育には、あまり含まれない項目	建築デザイン教育、従来の土木デザイン教育の両者に含まれる項目
・自分の考えを持つことの重要性 ・建築史 ・建設の文化・芸術的側面 ・設計の思想、理論 ・形態の美しさ（プロポーション、構図、仕上げ、ディテール、納まりなど） ・場の読み方、コンテキスト、風土や歴史文化と意匠 ・プレゼンテーション能力 ・建設には直接関連しない文化的・教養的な内容 ・事務所の経営方法	・機能と形態、空間構成 ・都市計画、まちづくり ・構造、材料、施工 ・設備（光、音、熱など） ・積算 ・法規 ・仕事に対する姿勢、情熱 ・施主との対話の姿勢、折衝の仕方、設計料の交渉方法 ・共同設計者やメーカーなどとの話し方 ・段取りの立て方 ・意志決定の方法

(3) 教育方法

(a) 設計演習

建築デザイン教育における設計演習の重要性が示唆された。この点は第4章で詳しく考察する。

(b) 事例見学

学生が優れた事例を数多く体験することの重要性が明らかとなった。このような機会は、初期案では事例見学で対応しており、その重要性が検証された。

(4) 教員

建築デザイン教育におけるプロフェッサーアーキテクトの重要性が示唆された。この点は第4章で詳しく考察した。

(5) 学生

前述のように、才能やものづくりに対する興味を持つ学生を、景観デザインの分野に集めることが望ましいが、その手段は未解明である。

(6) 教育環境・設備

建築家は学生時代の非常に多くの時間を製図室で過ごしていることが明らかとなった。このような創作の場の重要性は景観デザイン教育においても同様だと考えられる。

初期案でも製図室の重要性を述べており、今回の調査によって検証された。

(7) 大学での教育と職場での教育の重要性

建築デザイン教育では、大学教育よりも職場での教育の方がはるかに重視されていることが明らかとなったが、これをそのまま景観デザイン教育にも適用することはできない。

建築分野では大学よりも設計事務所などの職場の方に優れた建築家がおり、建築デザインをリードしているが、景観デザイン分野では、優れたデザインの専門家の数が少なく、彼ら（彼女ら）は、大学、設計事務所、役所などに分散している。そのため就職後は景観デザインを学ぶことが出来ない場合も多いと考えられる。

そのため、景観デザイン教育では、大学教育の重要性が建築よりも高いと考えられる。

また、建築においても、今後は大学院教育が重要であるということが共通認識のようである。これは土木にとっても同様であろう。

6.3 第4章 教員とカリキュラムの大学間比較

第4章の目的は、1.7(3)「優れた建築家を多数輩出する大学と、そうでない大学は、何が違うのか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

着目点としては、教育目標、カリキュラム、学生の量と質、教員の量と質、大学の環境・設備、教育成果の評価方法などが考えられるが、ここでは、カリキュラムと教員に着目し、いくつかの大学の調査比較を行った。特に、建築デザイン教育の重点と考えられる「設計演習」と「プロフェッサーアーキテクト」について詳しく調査した。

その結果、次のことが明らかとなった。

6.3.1 調査結果

(1) 優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いている

東京大学や早稲田大学のような、優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に多くの時間を割いていることが明らかとなった（図6-4）。一方、京都大学のように、設計演習の時間が比較的短くてもある

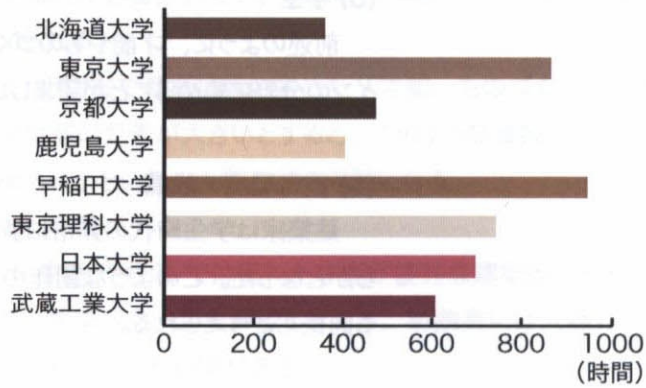


図 6-4（図 4-2 再掲載）建築計画・意匠関連の設計演習の時間数の比較
＊学部4年間の合計
＊卒業設計は含まない

程度の数の建築家を輩出している例もあり、設計演習の時間の長短は、必ずしも支配的なものではない。

(2) プロフェッサーアーキテクトの存在は、決定的に重要である。

教員1人あたりの学生数は、国立と私立では大きな差があるが、そのことは、優れた建築家の育成には、あまり関係がないことが明らかとなった。

一方、教員の質としての、優れたプロフェッサーアーキテクトの存在は、優れた建築家を育成するために決定的な役割を果たしていることが明らかとなった（図6-5）。優れた建築家を輩出する大学では、多くの才能豊かなプロフェッサーアーキテクトが学生の教育に関わっている。

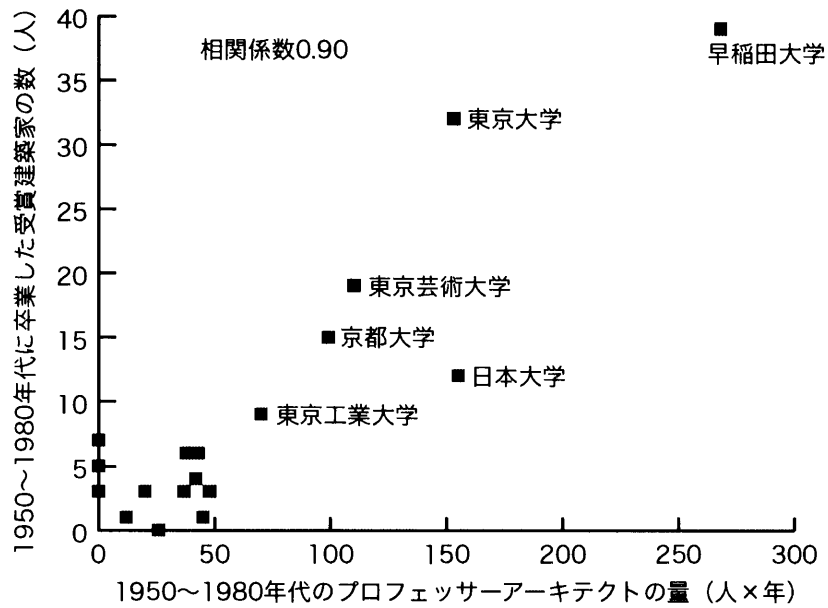


図 6-5（図 4-4 再掲載）1950～1980年代のプロフェッサーアーキテクトの量と、同時期に学んだ受賞建築家の人数の相関

6.3.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案について、いくつかが検証され、また示唆を得ることができた。

(1) 教育方法　ー設計演習ー

初期案では、設計演習増やす必要性は認識していたものの、その重要度や時間数の目安が不明だった。

今回の調査により、建築デザイン教育における設計演習の重要性が示唆されたが、その時間数が必ずしも優れた建築家の輩出の要件として支配的なものではないことも分かった。とはいえ、現在は土木関連学科の設計演習の時間は建築学科に比べて非常に少なく、これを大幅に増やすことが望ましいことには違いがないと考えられる。

設計演習の時間数の目安は、判断が困難な問題である。というのは、建築の設計演習の時間数が、土木に比べてはるかに多く、容易にその差を詰めることができるとは考えられないからである。優れた景観デザイン教育を行うためには、設計演習の時間数を増やすことが望ましいが、その時間数は建築との比較で判断できるものではなく、土木関連学科の教育内容や教育方法を全体的に見直し、そこでの議論に基づいて判断するものであろう。

(2) 教員　ープロフェッサーアーキテクトー

初期案ではプロフェッサーアーキテクトの必要性を認識していたものの、その重要度や、常勤または非常勤のどちらが望ましいかという点が不明だった。

今回の調査により、建築デザイン教育におけるプロフェッサーアーキテクトの重要性が検証された。これは景観デザイン教育でも同様だと考えられる。

また、プロフェッサーアーキテクトの役割が設計演習の指導だけでなく、雰囲気を伝えることや人脈を築くことまで及ぶことを考えれば、常勤の教員であることが望ましいと考えられる。

6.4　第5章 建築デザインの評価基準の特徴と課題

第5章の目的は、1.7(4) の前半「優れた建築とは何か、その評価基準はどのようなものか?」という問題を明らかにし、それに基づいて、景観デザインのあり方：初期案の検証と改良への示唆を得ることである。

ここでは、建築学会賞の選定理由や、第3者的な建築批評などを調査した。その結果、次に示すように、建築デザインの評価基準の特徴と課題が明らかとなった。

6.4.1 調査結果

(1) 芸術・文化・思想としての建築を重視

建築デザインでは、建築の芸術・文化・思想としての側面を重視する。そのため、技術的な点よりも文化的な点を重視する傾向にある。

例えば、建物の規模が大きいからといって単純に評価はしない。また、施工費用を軽視はしていないが、安いだけでは評価されず、建築の質の高さと両立していなければならない。また、施工精度や施工時の安全性については、ほとんど話題にはのぼらない。構造的な点についても評価はするが、構造そのものの評価というよりは、その構造によってもたらされた空間の質や構成といったものを評価している。

この理由の一つとしては、建築には様々な賞があり、構造設計や設備設計などの技術的な点や、施工の優秀さなどは、意匠関連の賞とは別の賞[11]で評価されるということがある。しかし、建築家の役割は、全てを統合して空間を構築することであるから、建築のある側面を軽視するというのは問題であろう。

(2) 新奇性やオリジナリティーをトータリティーよりも重視

建築デザインでは、斬新なことやオリジナリティーが非常に重視されている。部分的に極めて秀でている面があれば、それ以外にかなりの欠点があっても目をつぶる傾向にある。普通の人には住みにくい住宅、果ては違法建築さえ、学会賞を受賞している。逆に無難にまとめることはほとんど評価されない。

この理由の一つには、経験を積めば無難なものは誰でも作れるようになるという考えがある。斬新なものを生み出すのは限られた才能であり、そ

れを評価することが建築の進歩につながると考えているのである。また、もうひとつの理由は、次に述べるように建築デザインの評価の閉鎖性もあると考えられる。

(3) 閉鎖的、主観的な建築デザインの評価

学会賞の選考委員は建築家と建築研究者であり、建築界以外の人は含まれていない。また、先に述べたように日本では、メディアによる第三者的評価がなく、社会学者による評価も少なく、文化人による批評もない。さらに、一般市民にとっては、新奇性やオリジナリティーはさしたる問題ではなく、誰が設計したのかということさえ興味の薄いことである。

このように、建築デザインの評価は、建築界という極めて限られたムラ社会の中で建築の評価が行われているため、建築デザインの評価は世間からかけ離れる恐れがある。

また、建築賞の評価はかなり主観的であり、客観性があまり重視されない。これは芸術・文化・思想としての建築を評価する上で避けられないことであろう。建築における評価基準は建築家それぞれのものであり、客観的・絶対的な評価基準や基準による設計ではなく、独自のコンセプトの設定とその具現化が重視されている。そのため建築デザインの評価は、設計者の評価基準と評者の評価基準の衝突であり、結果はかなり主観的である。

(4) 自己完結的な建築の認識

建築関係者が建築を評価する際、建築を自己完結的に認識している。作品とその周囲との関係について議論はするが、作品と周辺との境界が強く意識されている。どこに境界があるのか分からないようなデザインはしないし、評価もされにくい。自己主張が重視され、他力本願的なところがないのである。

(5) 維持管理や耐久性、用途変更への対応の軽視

建築デザインでは、維持管理や耐久性、用途変更への対応に関する評価が比較的軽視されている。学会賞建築にも耐久性に欠ける作品がある。優れた建築でも３０年程度で取り壊されることが多く、建築が社会基盤のストックとなっていないことは、建築界でも問題視されている。

優れた建築が撤去される際、抗議や保存運動が行われ、社会的な問題となる場合もある。優れた建築の価値を軽視する施主の問題もあるが、耐久性や用途変更への対応を軽視する建築界にも問題があるだろう。

一方、古い建物のリニューアルが受賞したものは「倉敷アイビースクエア」の１件のみである。

(6) ソフトウエアを評価

建築は人の活動の場であるから、使いやすさは重要である。建築の使い方は多様であり、時間の経過によって変化することもある。建築デザインではハードウエアの評価が中心的であるが、近年は建築の使い方や運営方法などのソフトウエアも重要な評価の対象となりつつあり、今後その傾向

は強まると予想される。

6.4.2 景観デザイン教育のあり方：初期案の検証と改良への示唆

調査結果より、景観デザイン教育のありかた：初期案の教育目標について、いくつかの示唆を得ることができた。また、以下の内容は、第7章で建築デザインと従来の土木デザイン、景観デザインを比較した上で、再度考察を行う。

(1) 教育目標：どのような人材が必要なのか

(a) トータリティーを重視したデザイン能力

初期案では、「分析ではなく、統合する能力」「用・強・美に関する全ての条件を考慮し、一つの答えを出す能力」と記述していたが、「用・強・美に関する全ての条件」は、より詳しく記述する必要がある。

建築デザインから学ぶ点としては、芸術・文化・思想としての建築を重視している点である。また、改良が望ましい点としては、新奇性やオリジナリティーをトータリティーよりも重視している点や、自己完結的な建築の認識であろう。このような評価基準でデザインされた建築は、単体として良いとしても、それらが集まった町並みとしては調和のとれないものとなるであろう。

(b) 維持管理や耐久性、用途変更への対応を重視したデザイン能力

初期案の「用・強・美に関する全ての条件」には、耐久性に関する条件も含めなければならない。建築デザインの、維持管理や耐久性、用途変更への対応を軽視する評価基準では、社会的なストックとしての社会基盤を構築できない。

(c) 使いやすさを重視したデザイン能力

初期案の「用・強・美」の用は、言うまでもなく重要であるが、建築デザインから学ぶ点としては、施設の運営や企画などのソフトウエアの提案も重視されていることであろう。

(d) 主観的な主張能力

初期案では「コミュニケーションの力」と記述している。芸術・文化・思想としての建築を評価する上で、主観的な評価は避けられないものであり、主観的な主張能力を必要なものとして重視する建築デザインの姿勢には、学ぶべきものがある。一方、建築デザインの評価が閉鎖的であり社会一般の評価からかけ離れる恐れがあることは、改良すべき点である。

(e) 広い視野を持つ能力

初期案では「図だけでなく地をデザインする能力」と記述している。建築デザインの、自己完結的な建築の認識では、建築の周辺も含めた風景の美しさを想像できない。敷地だけでなくその周囲へも視野を広げなければならない。

6.5 今後の課題

以上のように、建築デザイン教育の調査と分析から、その特徴と課題が明らかとなった。第7章以降では、建築デザインと従来の土木デザイン、

および景観デザインの相違点に着目し、建築デザイン教育から学ぶことや、改良すべきことを明らかにしたうえで、今後の景観デザイン教育のあり方について考